

桜見通信

2013 no.26(水無月号)

題字♡marina

イラスト♡小西画伯

sakurako tsu-shinn

昔。地球はたくさんのお月をもっていた。

『私たちは夢を見ることを恐れてはなりません。理想を抱くことを恐れてもなりません。そして私たちの足取りを、「便宜」や「効率」といった名前を持つ災厄の犬たちに追いつかせてはなりません。私たちは力強い足取りで前に進んでいく「非現実的な夢想家」になるのです。』

小説家、村上春樹さんのスピーチの一部です。彼はこのスピーチで東北を襲った未曾有の悲劇(地震・津波・原発事故等)から得た反省の気持ちを書きました。ここでボクは原発の是非を話したいとは思いません。ただ彼の言うところの「原子爆弾の悲劇」を私達は忘れてい

第一回『ガリヴァー旅行記』をどう読むか?

鶴篁 (ジャッコウ)

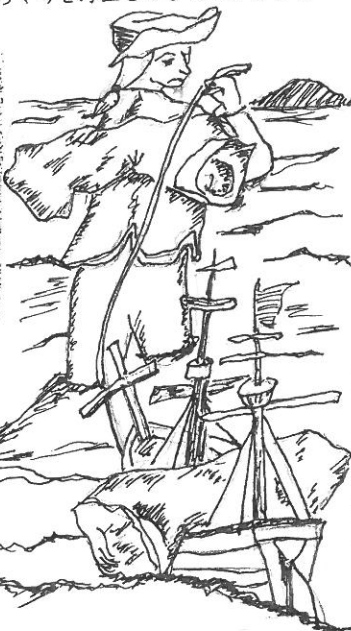
これから三回に分けて諸学を散策し、素朴な疑問を学問的に深めて考えてみたいと思います。三回の思索から自分の「学び」を問い直そうというのが目的です。

スウィフト『ガリヴァー旅行記』(1726年)第三編「飛ぶ島ラビュータ」の発想は、その後、宮崎駿「天空の城ラピュタ」という映画に取り入れられた。ご覧になった人の中で「島を浮遊させる飛行石は存在するのか?」と石を探したり、あるいは、「飛行石の原理は何なのか?」という素朴な疑問をもった人も多いただろう。

エリザベス女王(1世)の侍医で静電気や磁気の研究の先駆者ギルバード(Gilbert William・1544~1603)は1600年『磁石について』という磁気についての実験結果を一著にまとめ、地球が一つの巨大な磁石であると指摘している。ラビュータは直径4マイル半の円盤形の島で、巨大な天然磁石を備えており、下にある土地の特殊な鉱石の作用を受けることを利用して空中を移動する島である。映画内では洞窟内で飛行石に反応して石が青く光った場面が描かれているが、これは大地の鉱石が天空の天然磁石に反応した場面を描いたのであろう。スウィフトは言う、「磁石の一方の極には吸引力が与えられ、他の極には反発力が与えられている。そこで、吸引力をもった極が地上に向けて垂直になるように磁石を動かすと、島全体が下降するし、逆に反発力をもった極を下に向けて、島は真っ直ぐに上昇していく。磁石の位置を斜めにすると、島も斜めに向って動く」と。

こう読んでいくと、スウィフトはギルバードが示した地磁気の伏角の性質を用いて自らの発想を小説化した、つまり、小説の背後に存在する、深い学識があったのである。その後、ギルバードの考えは、地球を一つの巨大磁石と解釈し、惑星は太陽から磁気的な力を受けて公転しているというケプラーの解釈を生み出した。この解釈自体は成り立たないが、重力が惑星の運動を決定するというニュートンの研究の布石ともなったのである。その意味では、間接的にギルバードは文学作品と科学の誕生の礎を提供したといえる。

文章は「解れば読める」=「読めれば解る」世界であり、「解れば」文章に隠された知的からくりを浮上させることができるのではないだろうか?



by T. kony

の前で私達は返す言葉もなく無力で「忘れた」のだ、と。そして効率や利便性を優先させてきたのです。そこには「安全神話」なるものがあったかもしれない。しかしそれはやはり神話にしか過ぎなかった。私達は忘れるべきではなかったのです。安全以上の幸福があると思っただけでいけなかった。失ったからでは遅かった。それでもまだ世界は効率や利便性を追いかけてはいませんか。スピードを求め「スローなもの」を切り捨てようとはしてはいませんか。ボクらの日常は忙しい。本当に忙しくて忙しくて、いつも何かに「追い立てられて」いる。大人たちだけでなく君たちにも同じようにボクには見える。ボクらはそんなに急いで一体どこに向かおうとしているのか。昔、地球は幾つもの月をもっていたと言います。地球から見える月面と見えない裏側は光景がずいぶん違うのだそうです。ち

ないか、忘れてきたから今再び、「悲劇」は起こったのではないかと彼の問いかけに共鳴し君たちに呼びかけるのです。彼はまたこうも言います、繰り返された悲劇は私たち全員に責任だ、と。私達は悲劇をなぜ忘れたのでしょうか。彼は説明します。「理想」は夢で、それは現実的ではなく実現不可能だとか、今の利便性を捨てて快適な暮らしを否定できるか、たまたまの不幸のために目の前の幸福を捨てられるのか、というような投げかけ

うみなし

編集後記

豊舎寒九

なみに地球から見える月面を「マリア」と呼ぶそうです。こんな知識が何につながるのかは分からないが、しかしひよつとすると、「こんなもの」から新しい発明や人々を幸福にする何かが生まれるような気がするのです。「非現実的な夢想家」は「非現実的な理想」を追いかける。しかしその姿勢や方向は間違っていない。君はスーパー・ムーンを見たか。六月二十三日の夜は楕円軌道の月が地球に最も近づく夜でした。つまりこの夜に見える満月は一番大きく見える月だったのです。場所によってはいつもの月の1.5倍近くも大きく見えたと言います。明るさはふだんの30%増だったそうです。「悲しいかな僕の住むところでは小雨まじりの天候で光がほんやり見えた程度でした。今の僕たちは「スーパー・ムーン」と呼びその大きさを楽しんだりしていますが、昔の人はどうだったのでしょうか。大きな月に「吉兆」を見たでしょうか、それともそこにあるのは「凶兆」だったでしょうか。大きな月はいつもより大きな引力で人の体に影響を与え、頭に血が上るような興奮状態をつくったかもしれません。そんな中、「狼男の伝説」は生まれたのか。はボクの想像です。月の美しい季節は秋ばかりではありません。夜空を見上げ、月を堪能してみようでしょうか。月は古来は「つく」と読みました。月を見上げて人間に何がついたのか、想いを馳せるのも一興です。

先ず行ふ、其の言は而る後に之に従ふ (爲政第二)

「まずおこなう、そのことばはしかるのちにこれにしたがう」

読解・解釈

自分の理論が正しいことを証明するのに、説得に膨大な時間を費やすより、行動し実績で示すこと。

自分の理想とするものが如何に素晴らしく現状がダメかを語るより、少しでも現状を理想に近づけるべく行動すること。

言葉と行動はとても深い関係にあります。

言ったことを行動すると「有言実行」となります。

言わずに実行すると「不言実行」となります。

言ったことを実行しないと「うそつき」となり信用を失います。

言わずに行動もしないと存在を認知してもらえません。

「言う」「言葉にする」ことはとても大切なことです。

でも、もっと大切なのは「行動に移すこと」「行動すること」です。

行動することは難しい。しかし初めから難しいと思つて何もしないのはどうだろうか。村上春樹が言うように「非現実的な夢想家」に憧れ、理想を追いかけよう。誰かが夢見なければ何も起こらないと僕は思っています。「有言実行」大いに結構です。「不言実行」はカッコいいけど、ね。